

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第2回



山本卓朗

土木学会第99代会長

今回は、2011年度に土木学会会長を務められた山本卓朗氏です。市民工学への回帰を唱え、土木の原点を見つめてこられた前会長らしい3冊をご紹介します。

進

むべき道を模索しようとする

とき、人は言葉の意味を深く掘り下げ、また今日に至った過程としての歴史を振り返る。日本は高度成長期から成熟社会に移行するどころか、表層的な議論と場当たりの行動の繰返しのうちに、長らく低迷している。この状況下で土木の原点を考え視野を広げるためには、目先の知識やハウ・ツーものを読んでも意味がない。世界の歴史と土木を結びつけ、工学的リベラル・

アーツに踏み込む必要がある。以下の3冊はそうした思いから選ばれた。

まず『東京駅誕生』について。ご自身は実は長らく東京駅のプロジェクトに関わってこられた。折しも2012年10月には丸の内駅舎の復原工事が完了し、人びとの注目も高まった。しかし単に東京駅がどのように建設されたかの歴史的事実に触れるのではなく、日本の鉄道140年の歴史の流れを想起することこそが重要である。この本は、

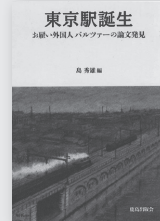


YAMAMOTO Takuro

土木学会第99代会長(2011年度)、東日本旅客鉄道(株)常務取締役、鉄建建設(株)社長等を経て、現在(社)未来構想プラットフォーム会長。

ドイツ人技術者バルツァーの論文をはじめ、その時々の技術者がどのような環境と意思のなかで東京駅や高架橋を設計、建設したのかをリアルにたどることができる。『日本奥地紀行』は、江戸末期にイギリス婦人が日本各地を訪ね、そこでの見聞と印象を本国に書き送った手紙を編さんしたものである。当時の日本を知るというだけでなく、文字通り奥地で書かれた英文の手紙が何人もの手を経て英国まで届けられていた。そのことを彼女が見たであろう風景とともに想像してみると、イメージは一層新鮮になってくる。

『地政学入門』は知人に紹介されて読まれたとのことで、地政学という存在を知ったことでまず視野が広がった。日本は島国であるとは皆我知っているが、それが意味することを地政学的にとらえてみることで、日本列島への認識が新たになり、平和ぼけた頭に戦略的なまなざしが芽生えてくるだろう。3冊に共通するのは、記述の具体性とディテールへの注目である。要約と整理されたものではなく、生データに近い記述が続く。それは時に読者をいらだたせるかもしれない。しかし、こうした具体と細部からかつてあった世界をリアルに想像し、おもしろがってみるのが大切なのだとおっしゃる。まさしく読書の楽しみとは、テキストをたよりに眼前に広がるイメージの世界に遊ぶこと。その想像力が創造する力を養っていく。



東京駅誕生

島 秀雄=編：鹿島出版会



日本奥地紀行

イザベラ・バード：平凡社ライブラリー



地政学入門

曾村 保信：中公新書